

八月の幼児童謡

葛原しげる



八月は夏の終の月ではあります、地球は熱せられて、北半球に於ては、正に炎熱、殊に日中の暑苦しさは、草も木も、萎れるほぎです。その中で、獨り、その暑さを悦ん

「もし、庭に、此の向日葵でも咲いてるましたら
「あの花にまけない様に」
「さも申しませうか。」

向日葵は、太陽の方へ向いては開く、さいふごほり、そ

向日葵

葛原
梁田
貞氏作曲

の爲に文字も「向日葵」いかくのですが、實は、一株の向日葵の花が、群れて咲いてゐるのを、屡々、よく見ましたが、必ずしも、さうではない様です。太陽の方ばかり見上げて

はるなり様です、それは別に新發見ても何でもあります
んが、少くとも、日の方へ向いてるなくても、強烈な真夏
の日を、決して、困らないやうです。

「暑い」こ弱音をはく幼兒がありましたら、近頃ならば「戦地の兵隊さんの事を考へて、我慢しませうね」といふ所を、

夏の雨は、多く「夕立」である事が特殊です。夕立は、南洋のスコールではあります、日中の暑さを洗ひ流してくれる、まことに、清涼剤です。しかし、野遊びをする幼児は、急いで歸らにやなりませぬ。何んに、可愛い目高の子を、小川に見つけてをらう、野原一面の花が、何んに美くしからう、遊んでるてはなりませぬ。

——夕立——

森柳頼次氏歌
宮原

ごろ／＼遠くで　かみなりさん
びか／＼光るは　いなびかり
雨雲もく／＼やつてくる
急いで歸らにや　びしよぬれだ

野原は一面　花畠

小川に　かはいゝ目高の子

それだに雨雲　やつて来る

急いで歸らにや　びしよぬれだ

(童謡唱歌名曲全集——一)

夕立を、好むものは、暑さに困つてゐる人間ですが、夕立を恨むものはまづ垣根の外へ出て、おいしい餌あさりをしてゐた鶏共ですね。鶏の中でも、雄鶏は、きつこ、きよ

ろきよろ見廻しながら軒下まで走つて歸つて、雨脚に見

れてるでせう。

今一つ、蜘蛛が、怒つてをりませう。折角骨を折つてつた巣を、壊さんばかりの夕立、しばらくは、眞中の蜘蛛の王座に、頑張つてをりましたが、遂に堪へかねて、逃げ出しました。

鶏と蜘蛛で、夕立の氣持を出さうとしたのです。わけて

「コケココ、コッコ」　さんでくる

「スタコラサッサミ　にげて行く」

の対比は、此の歌曲の生命です。前者は「さんでくる」であり、後者は「にげて行く」のです。しかし、人間なら、御尻を端折つて、足袋は脱いで、新しいカン／＼帽は、懐に入れても逃出す所ですから、あわて氣味ですから此の曲は、速くない之間が抜けます。

——夕立——

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

一、ビカ／＼光る電
ゴロ／＼なり出す雷に

おぎろき　あわてゝ　垣根を　くぐり
にはさり　にげて　さんでくる
コケココ　コッコ　さんでくる

二、ザワ／＼木の葉が　ゆれ出して

大雨に
バラく降り出す

八つ脚ひろげて るばつてをつた

大きな蜘蛛がにげて行

スヌーピー サンサン

(大正幼年唱歌第六集)

赤 青 きいろ

かけはしが

美しや 虹のいろ

卷之三

夕立の後の定石は、虹です。虹は自然界の不思議であり、美しさの極致であり、しかも、それが、氣體であるだけに、すぐ消えるものであるだけに、例の文字通りのモメンタルなものではないにしても、しかし、果敢なく消えて何のあいかたもなくなるものであるだけに、空間で消える歌の聲と同じに、まことに印象的であります。そして、床下も優に、また雅に、上なく清らなる美しさであります。ですから、北極のオーロラは知らない幼兒には、あんな帶がほしく、あんな太鼓橋を渡つて見たいのです。一體、あんな美しい帶は誰が巻き、あんな美しい橋は、誰が渡るだけでさう。

夏の谷川には、水増して、くる／＼まはる水車は、夜晝やすまず、廻りつゝけて、豆を挽き、米を搗きます。そして、その音は、水車の羽根板が、水に突き入る時、ドブリコであり、ドンブリコであります。そして、車が廻れば、自も廻つて、軌る音は、ギイであり、杵の落ちる音は、トントンでありますから、ギイトン、ギイトンミ、景氣のよい事です。これは、曲が、極めて如實に、音で、此の感じを描き出してゐて、愉快です。

葛原 しげる作
梁田 貞氏曲

水車

クルツ クルツ 車 水車

水は夜ひる ドブリコ ドンブリコ

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

虹が出た 虹が出た
あれ あれ きれい

虹

それは、汚れたる大人は駄目——聖なる、神の子たる幼兒だけ——幼兒でなくては、その特權は與へられないもの

さ、きめませうね。美しく、妙なる虹の帶、虹の橋。

虹

虹が出た 虹が出た
あれ あれ きれい

あれ あれ きれい

七色の大きな虹が
大空に

虹が出た 虹が出た

美くしや 虹のいろ

赤青きいろ

いろくのきれいな帶が

美しや 虹のいろ

卷之三

(大正幼年唱歌第六集)

お舟も、これは、おもちゃの帆かけ舟です。その帆柱の先には、必ず、日章旗をつけておきませう。それが、お池の水にうつる美しさ、水の中の影までも、キラ／＼、光る氣持がするではありませんか。日の丸の國旗は、こんなにまで、美しく、元氣がよいのです。彼の「白地に赤く日の丸染めて」の唱歌もありますが、さうした色の對照の美しさは、明確に、幼児が意識して、讃美するこことは不可能です。

唯、具體的に、直観的に、綜合的に「あゝきれい」なのです。

「イエス」か「ノウ」かの二つの中の唯一つのことです。「好き」

か「嫌ひ」かの何れかの唯一つのことです。妥協もなく、おつき合もないのです。國旗の美しさに、朝日の昇る勢見せて、

これは、大人の連想です。幼児の連想ではありません。この

「お舟」は、大正三年頃の作です。

——お
舟——

葛原しげる作歌
梁田貞氏作曲

お池に浮べた帆かけ舟

帆は 真白で

帆ばしらに

日本の旗が ヒイラヒラ

日本の旗は 日の丸よ

水にうつつて キイラキラ

(大正幼年唱歌第二集)

夏の夕涼みで、樂しいのは、空を仰ぎ見て、星の神祕を感じる事です。大小様々の星が色も様々に光つてゐるので、その光度も、いろ／＼であつて、全く不思議です。その不思議は、幼児には感ぜられないでせうし、感じないでも、少しも差支はありませんが、唯、空一面に光る星のめでたさ、美くしさ。見てゐる中に、涼しい風が吹いて来る、一段、星の光が、美しく思へるのは、見るものゝ氣持が涼しくて美しくなつたからなのですが、幼児には、そんな事は分りません。唯、美しいだけで結構です。

第一節は、「光れ」といつて、第二節で「光る」と、安心してをりますところ、擬態が、もとは

「空一面に ピカ／＼ 光れ」

「涼しい風に ピカ／＼ 光る」

であつたのですが、作曲者が、親しく幼児に教へて見て、それでは少しく、間が抜けたからみて、倍の速さに直したのです。その方が星の數も多い事ですし、如實に近くて、まことに結構でした。唯、幼児が、その速さで、歌へるか

を少し案じますが、雀の擬聲

「チユン、チユン、チユ／＼／＼／＼チユン」の後半が、小學二三年の児童にさへどうしても舌が廻らなくて歌へない事がありました。が、「ピカ／＼」は大丈夫だと思つてをります。

——お星様——

葛原しげる作歌
梁田貞氏作曲

お母さんに
だかれて ぴいかぴか

ピカ～～光れ 御空の星よ
きれいな色で 残らず光れ
小さな星も 大きな星も
空一面に ピカ～～～～光れ

そよ～～風が 御空で吹けば

きれいな星が 残らず光る

小さな星も

大きな星も
ピカ～～～～光る。

(大正幼年唱歌第七集)

少し、物語めくのですが、星が生れて、母さんが抱いて
ゐたのに、時には、星の母さんは出かけて、おるすになつ
ても、星の子は、一人で、光つてゐるといふのです。

幼兒には、分りにくい物語ではありますんが、されだけ、
興味を感じますこやら。しかし、かうした想像も、星の

世界——神祕の世界ですから、盛んに、させて見たいもの
ですね。

——星の子——

中村雨紅氏作歌
黒澤隆朝氏作曲

ゆうべ生れた星の子は
今夜は 赤子で ぴいかぴか

母さん おるすの星の子は
ひざりばつちで びいかぴか
それでも 泣かず
ぴいかぴか

(唱歌と遊戯)

○

八月は十五夜のを、待つまでもなく、夏の夜、納涼の臺
上に空を見上げて、星を話す氣持で、また、月を話す心涼
しさは、幼兒でなくとも、まことに格別です。

お月様は、いつでも、よいものですが、今夜は殊更に明
るく見えますので、どうしてですか？尋ねて見たのです。
するこ、

「今夜は、よく晴れてる上に、子供達の笑顔も見える
から、それで、私も、おのづから、ニコ～～して来て、
明るい氣持になつたのですから、その氣持が、顔に
も表はれて、明るく見えるんですよ。さうなんですよ。
人間も、心を明るくさへ持てば、顔も明るくなつて、
やがて光る様になりますよ」
こでも、お月様は仰せでせうか。

これも、大正三年頃の作です。

—お月様—

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

お月様 お月様

丸いお顔を ニコ／＼させて

きうして 今夜は そのやうに
明るく お見せに なりますか

子供たち 子供たち

今夜は 雲さへ 風さへなくて

日本國中 たゞ一日

皆の笑顔も見えるから

(大正幼年唱歌第六集)

「その二」は、前の二似てゐますが、これは少し、ませた口を利く子供を出しました。幼児にも、かうした一面はありますゆえに——「月夜を親しきは、いつでも善い」とも申します。月光を仰いでゐる、何だが、月を話して見たくなります。月光を話をして見たくはないが、月ばかりは、話をして見たくてたまらないのです。

きうして、こんななのでせう。

お月様、それは、もし、お家の誰かでもあるかのやうに、話したくなるのでした。もし、ほんとに、もし——もし、お月様が、お家の誰かであつたら、誰に當るのでせう。こ

んなに美しくて、こんなにやさしくて、しかも明るい人は、
お家の誰でせう。
考へて見ても、お家に、お月様に當る様な方が無くては、寂しいですね。

—圓い明るいお月様(その二)—

葛原しげる歌
弘田龍太郎氏曲

お月様 お月様

まんまる まるいお月様

明るい／＼お月様

私は

あなたを見てます

お話をしたくて たまりませんの

お月様 お月様

あなたが もしも人ならば
お家の誰かで あるならば

あなたは

私のお母様

それとも やさしいお姉様でしょか

お月様 お月様

(幼年童謡集二)

花には嵐、月に雲、とかく浮世は、なき、これは大人の世界のセンチメンタリズムですが、幼児は、空に雲の飛んでゐる夜の月は、月が、出たり、かくれたりするのが、而

白くて、見飽くことはありません。そこで、遂に、大

それた慾を起して

「お月様、遊びませうよ」

と申込んだものです。下界の幼兒の聲は、月宮殿にも、は
つきり聞えましたので

「よろしい。何をして遊びませうか」

「お月様はさつきから、空で、誰か隠れん坊をしていら
したんではありますか」

「なに、獨りだから何もして遊べませんよ。唯、雲から出

たり、はいつたりして見たゞけですよ」

「ぢや、かくれん坊いたしませう」

「よろしい」

そこで、下界の幼兒は、天界のお月様、ジャンケンをして、鬼になつたと見えます。第二節が、狙ひなのです。
「見つけましたよ、お月様

雲の中

といふ、少しも惡びれないで、出て来てニコ々としていら
つしやるのでした。此の笑顔の氣持よさ。世の中の大人の
凡てが、幼兒へは、このお月様のやうでありたいのです
ね。

——お月さん遊び——
葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

お月さん遊び

かくれんぼして遊び

ジャンケンボンよ

お月さんを見つけた

雲にかくれたお月様

出て来て ニッコニコ

(童謡唱歌名曲全集一)

月の中には、兎がゐるといふのです。満月の中には、兎
が杵振上げたと見られなくもない影が見えるのですが、兎
をお月様の使さは考へ易いことです。少くとも、月の夜兎
は、兎蹄もしたいこでせう。はねても見たいこでせう。
ですから、「はねじまん」なのです。しかし、その理由は、
分らないのです。はねてさへをれば、それでよいのです。
この山五つ、谷七つ、なごは、幼兒には分りにくい好み
かも知れませんが……。

うさぎ うさぎ

何見て はねる

十五夜 お月様
みてはねる

さは、昔の童謡で、今日、琴唄にさへなつてをります
ほり、兎三月さは、まことに古くから、結ばれてをります
ね。

——月夜の兎——

びよん／＼兎は なぜはねる
なぜだかしらない はねじまん

月夜の晩なら 山五つ
七つの谷まで はねて行く

谷間は深かる 月夜でも
七つの谷から きこへ行く
きこへも行かない はねじまん
びよん／＼はね／＼ またかへる

(童謡唱歌名曲全集一)

昔から、有名な月の唱歌が、幾つもあります。「出た／＼
月が」もありますが、「盆の様な」さいふ形容に、多年、私は
抗議を抱いてをりますが、しかし、面白い比喩です。

これは、月の形の變化する事を扱つたものですが「櫛の様
に」さいつても、つげ櫛を知らない今の幼兒には、少しく不
向ですが、曲も極めて幼兒向で、すてられない歌曲ださ信
じてをります。

石原和三郎氏歌
納所辨次郎氏歌

永廻藤一郎氏歌
田村虎藏氏歌

——お月様——

濱田廣介氏歌
中山晋平氏歌

お月様 えらひな お日様の兄弟で
三日月になつたり まん圓になつたり

春夏秋冬 日本中をてらす
春 夏 秋 冬 日本中をてらす

お月様若いな いつも年をさらないで
椿の様になつたり 鏡の様になつたり

春夏秋冬 日本中をてらす

(童謡唱歌名曲全集一)

お月様の不思議は、見るものと一緒に歩いたり、停つたりするこゝ、又、圓くなつたり、三日月形になつたり、西瓜形になつたりするこゝです。この歌曲は、前の三同じく、かなり古いのですが、今でも、教へられたいものゝ一つです。

「お月様は、をかしいな」

は、「可笑しい」ではなくて、「不思議だよ」の意であるこゝ、申すまでもありません。

——お月様——

永廻藤一郎氏歌
田村虎藏氏歌

お月様 お月様は をかしいな
わたしが歩けば お月さんも歩く
わたしが止まれば お月さんも止る

お月様は をかしいな

お月様 お月様は をかしいな

圓いご思へば 次第にかける

かけたご思へば 次第に圓い

お月様は をかしいな

(童謡唱歌名曲全集一一)

月の古謡の中に

お月さん なんぼ

十三九つ

さは、私の郷里の方にあるのですが、これが、東京その他では、

お月さん いくつ

十三七つ

さ歌はれてをります。「なんぼ」「いくつ」さは、地方によつての、數の問ひ方ですが、「十三九つ」「十三七つ」その差は、さうして出来たでせう、系統を調べて見たく思つてをりますが、その次が

「そりや まんだ

若いぞ」

さいふのですから、若い方がよいでせうか。それは兎も角もして、この月の唄は、全國的であることをでも分るこほ

り、月は、皆好きですね。

○

最後に一篇、ロシヤの童謡を添へておきます。これは、如何にも、理窟ぬきの、素朴な物のいひ方で、甚だ愉快です。蟻が八匹、蜘蛛が三匹といふ數の決定は、さうしてしたものか分りませんが、

蟻が踊るさ、蜘蛛が、驚いて、天井から落ちた
さいふのが、理窟ぬきに面白いではありますか。

——蟻と蜘蛛——

葛原しげる譯歌
ロシア名曲

小さな蟻が 八匹よつて
天井板で をぎりをするさ

大きな蜘蛛が 三匹をつて

お目々をさまし 驚き落ちた

(大正幼年唱歌第十二集)